

陸前高田市立博物館所蔵被災金鉱石の歴史的意義

目時和哉・吉田 充・赤沼英男・熊谷 賢

陸前高田市立博物館所蔵被災金鉱石の歴史的意義

目時和哉¹・吉田 充¹・赤沼英男¹・熊谷 賢²

Historical Analysis of Gold Ore Recovered from the Rikuzentakata City Museum
after the 2011 Tōhoku Earthquake and Tsunami

Kazuya METOKI¹, Mitsuru YOSHIDA¹, Hideo AKANUMA¹, and Masaru KUMAGAI²

1 岩手県立博物館 020-0102 盛岡市上田字松屋敷34 Iwate Prefectural Museum, Morioka 020-0102, Japan.

2 陸前高田市立博物館 029-2201 陸前高田市矢作町字二田野55 Rikuzentakata City Museum,
Rikuzentakata 029-2201, Japan.

Abstract

It is believed that the gold ore recovered from the Rikuzentakata City Museum after the 2011 Great East Japan Earthquake and Tsunami was mined from the outcrop of the *Yahachi* mine in Sumita, Iwate Prefecture, Japan. EPMA analysis before stabilization treatment revealed that the gold part of the ore consisted of more than 90% gold and over 5% silver by mass. The white part of the ore is believed to be composed of quartz, calsite, and feldspar. This composition correlates with the composition of the deposit in the *Yahachi* mines mentioned above.

In 2005, gold ore was discovered at the Yanaginogoshi Iseki (the archaeological site), Hiraizumi, Iwate Prefecture, Japan. EPMA analysis revealed that the gold colored section of the ore was composed primarily of gold and silver, and of a similar composition to the deposit found at the *Yahachi* mine. In addition, there are many gold mines distributed throughout the Kesen district. According to old documents, the Kesen district was known as a popular gold mining area during early modern times, and its gold production is likely to date back to the late Heian period (the 12th century A.D.). Based on these research findings, we can hypothesize that the Kesen district is where the powerful Oshu Fujiwara Family, who controlled the entire Oshu area, obtained their gold from.

はじめに

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震に伴う大津波によって、岩手県内における博物館をはじめとする文化施設が多く被災したことは周知のとおりである。とりわけ陸前高田市立博物館は施設がほぼ完全に水没し、多くの展示・収蔵資料が流失した。それを免れた約20万点の資料も全て海水損した。

同館では複数の気仙産金関係資料を所蔵していたが、展示場から流出した玉山金山関係資料については発見できなかった。一方、岩手県住田町八鉢鉱山関係資料については館外に流出した金庫の中から無事発見された。上記2資料については、過去に同館において開催された展覧会等において、資料に関連する学術情報が公開されていたが、それらは資料台帳等の流出により、ほぼ完全に失われた。

このような事態を受けて、救出した資料の安定化処理と並行し、その学術的調査も実施した。その結果を以下に報告する。

1 被災気仙産金関係資料の概要と救出状況

住田町内採集金鉱石は2005年に陸前高田市内に住む個人が陸前高田市に寄贈した資料である。寄贈後は同市立博物館一階収蔵庫の貴重品用金庫内に保管されていたが、大津波により金庫は館外に流出し、一時的に行方不明となった。

2011年4月、岩手県大船渡警察署より拾得した金庫の所有者に関する照会があり、陸前高田市立博物館一階収蔵庫から流出した金庫であることが確認された。金庫には海水と汚泥が浸入し、資料の確認は困難をきわめたが、庫内より無事当該資料を救出すること

ができた^(註1)。救出後、水道水による応急的な洗浄が施され、同年5月から翌年3月まで、閉校となった旧陸前高田市立生田小学校にて保管されていた。

2 被災資料の安定化処理

2012年3月、住田町内採集金鉱石の劣化状態の調査と、その状態に応じた安定化処理を行うため、当該資料を岩手県立博物館（以下「当館」と記す）に搬送した。肉眼観察の結果、海水損に起因する塩分を含んではいるものの、顕著な劣化は認められなかった。

そこで資料表面の汚れを洗い落とした後、水道水に浸漬し、24時間毎に脱塩液を交換する作業を3回繰り返した。その後蒸留水に一昼夜浸け、塩素イオンメーター（TOKO TiN-5102i）による測定で塩分の溶出が認められないことを確かめ、減圧乾燥した。

3 住田町八鉢鉱山採集金鉱石の自然科学的調査

救出された金鉱石は、過去に行われた他館展覧会への出品履歴があり、住田町八鉢鉱山にて採集された資料であることが確認された^(註2)。

安定化処理後に実施した肉眼観察では白色を呈する鉱物部に金部（金色を呈する部分）が混在していて、白色部は主として石英と長石から構成されているものと推定された。

続いて行われたEPMA分析の結果、金部は主として90%以上の金および10%未満の銀によって構成されており、白色部には石英および方解石の存在が確認された（図1）。この結果は5で述べる八鉢鉱山の地質鉱床とも合致する。

4 玉山金山周辺採集砂金の自然科学的分析

玉山金山跡には和右衛門坑、千人坑、尺八堀坑や、近世～現代の掘削跡が残っている（写真1・2）。玉山の山頂付近には玉山神社が建立され、神社後背から北側にかけては山の斜面を切り崩した跡が、また、神社南側には和右衛門坑跡があり、ここから西側にかけて掘削跡が連続する。玉山を挟んで南側には木町沢（通称、以下同）が、北側から東側には壺の沢川が流れる（写真3）。

玉山神社は標高約420m付近にあり、斜面下側には大小のズリ（採掘に伴って生じた廃石）が小山や平場を形成し不規則に分布している。昭和54年の空中写真には木町沢沿いに西に延びる林道が確認されるが、

その後金採掘を目的とした開発により山の地形自体が改変され、現在その林道は部分的に確認されるにすぎない。

木町沢上流では斜面の掘削に伴い造成されたと見られる幅3～5mの道路が蛇行しながら木町沢の谷底に続く。この木町沢沿いには階段状の平場が形成されており、沢に平行して流れるより小さな沢も所々に確認



写真1 和右衛門坑跡入口



写真2 千人坑跡入口



写真3 玉山を流れる壺の沢川

される。人工的な平場は鉱山開発に伴って設けられたものと思われ、木町沢周辺で盛んに産金が試みられていたことがうかがわれる。

この周辺で砂金採集を行ったところ、写真4に示す地点をはじめ、複数個所で採集することができた^(註3)。採集した砂金は17個で、すべて1mm以下の粉金である。いずれも角張っており、金鉱石から部分的に剥

離して間もない形状を示している(写真5)。資料の中には白雲母と推定される鉱物に付着したままのものもある^(註4)。

図2に玉山金山付近で採集された砂金のEPMA分析結果を示す。90%以上の金および10%未満の銀を主成分とする砂金であることがわかった。前述のとおり、陸前高田市立博物館所蔵玉山金山採集金鉱石は大

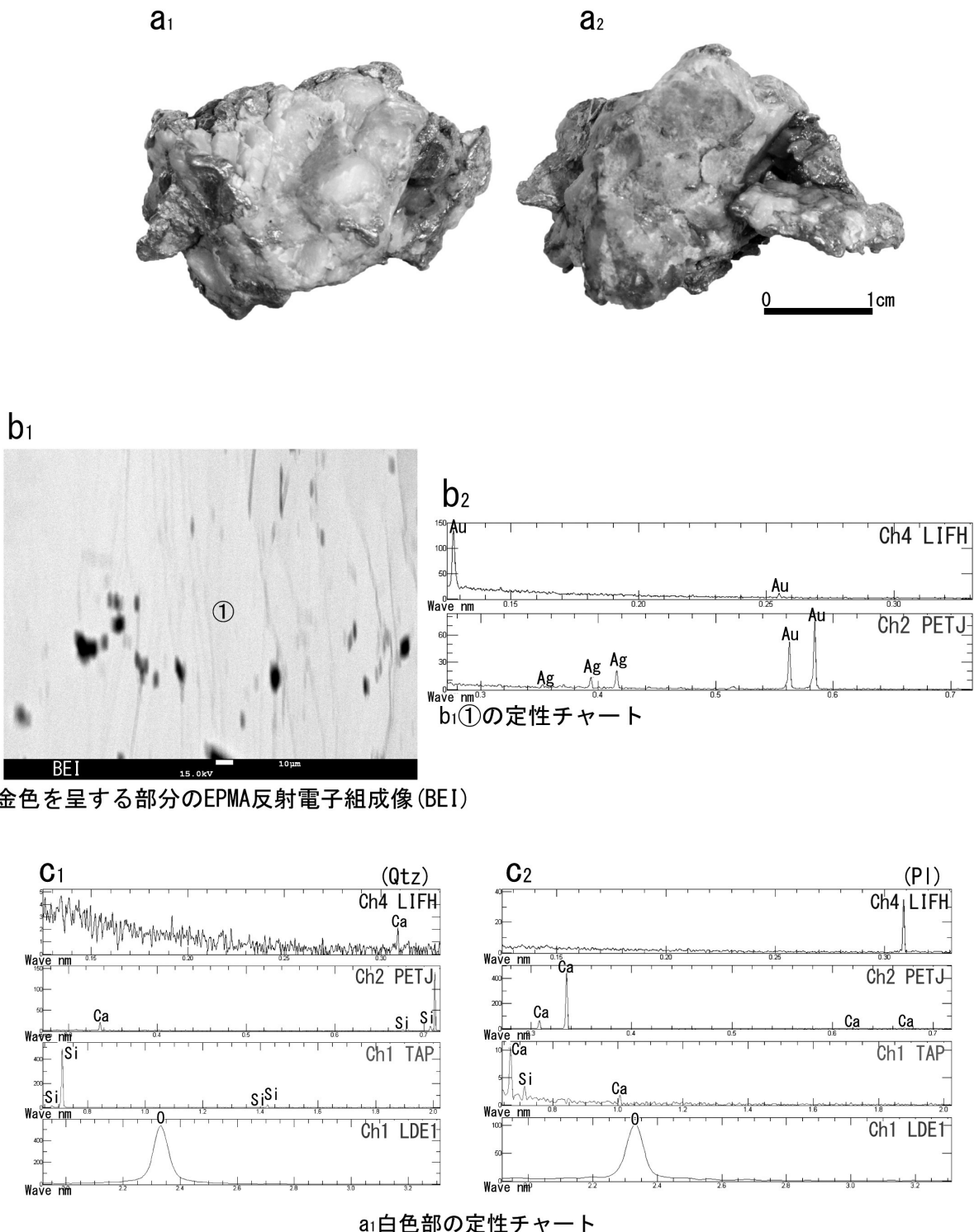


図1 岩手県住田町八鉢鉱山採集金鉱石のEPMA分析結果

津波により流失したが、同金山周辺を含む岩手・宮城両県内数ヶ所で採集された砂金について、過去に組成分析がなされている（表1）。その結果は金と銀を主

成分とする純度の高い金が玉山金山周辺で採集可能であることを示すものであり、今回採集した砂金の分析結果とよく整合する。



写真4 砂金採集地点（木町沢）

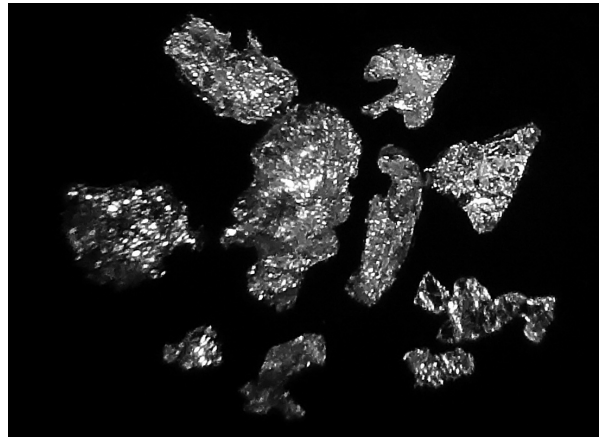


写真5 玉山金山跡周辺で採集した砂金（40倍）

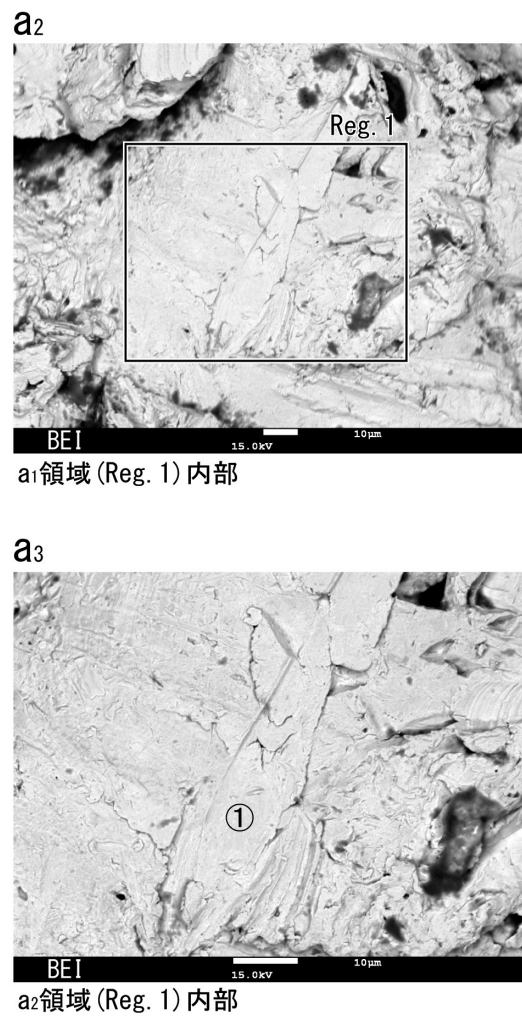
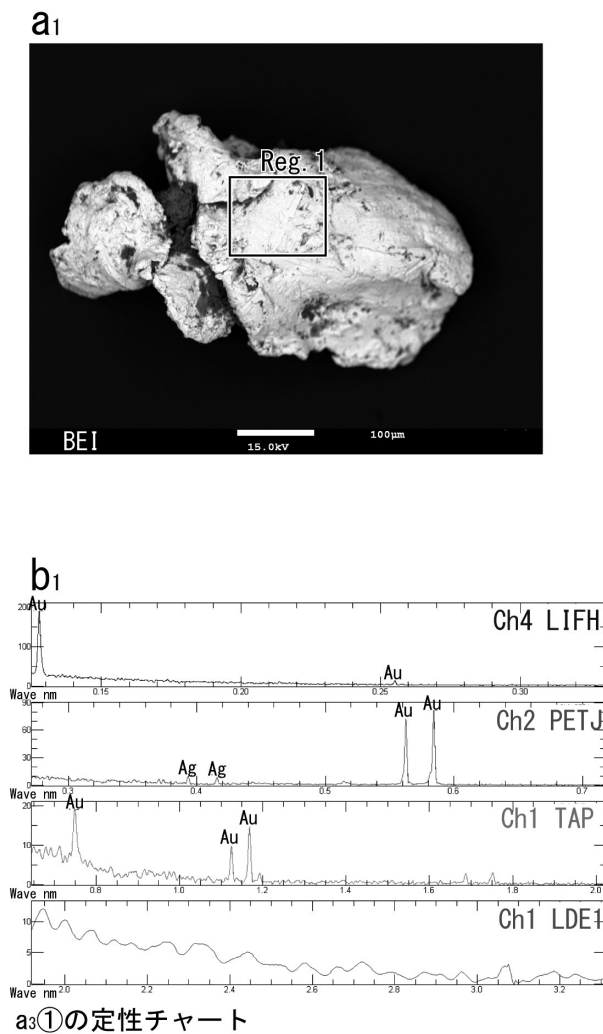


図2 玉山金山周辺採集砂金のEPMA分析結果

表1 岩手・宮城両県から採集された砂金の調査結果

採取場所	形状など	金 (%)	銀 (%)	鉄 (%)	銅 (%)
岩手県陸前高田市玉山	微粒、角	83.2	16.8	< 0.1	< 0.1
岩手県陸前高田市雪沢	微粒、角	90.5	9.5	< 0.1	< 0.1
岩手県一関市大東町猿沢	微粒、角	85.7	14.3	< 0.1	< 0.1
岩手県大槌町金沢	微粒、角	87.2	12.8	< 0.1	< 0.1
宮城県気仙沼市唐桑町馬場浜	微粒、角	89.4	10.6	< 0.1	< 0.1
宮城県気仙沼市本吉町小浜	微粒、丸	89.5	10.5	< 0.1	< 0.1
宮城県南三陸町入谷水尻川	微粒、丸	90.1	9.9	< 0.1	< 0.1
宮城県栗原市金成有壁有馬川	微粒、丸	90.1	9.9	< 0.1	< 0.1
宮城県栗原市金成畑夏川	微粒、丸	88.3	11.7	< 0.1	< 0.1
宮城県涌谷町五郎沢	微粒、丸	87.5	12.5	< 0.1	< 0.1
宮城県涌谷町黄金山神社前	微粒、丸	88.5	11.5	< 0.1	< 0.1

田口勇・尾崎保博編『みちのくの金一幻の砂金の歴史と科学―』（アグネ技術センター、1995年）p.110 掲載「東北地方の砂金、砂金塊と板（墓）碑の採取場所、形状などと分析結果」より一部抜粋・加筆。

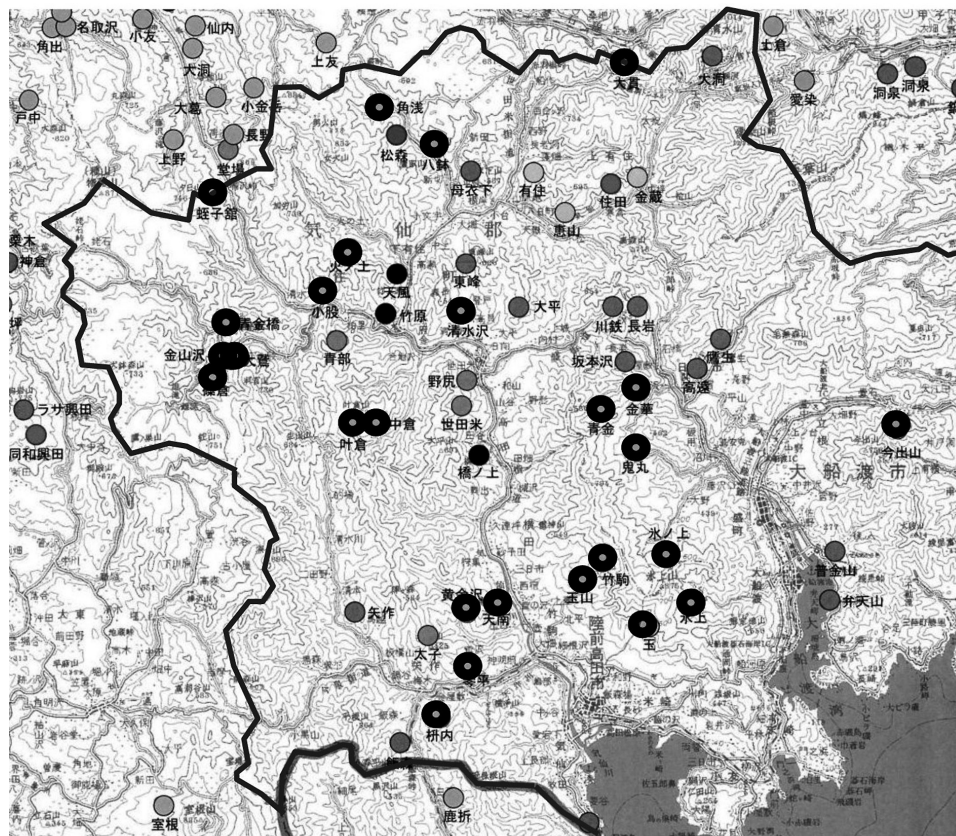


図3 気仙地方の金鉱床分布図 「岩手県鉱山分布図」岩手県立博物館（2010年）より一部転載

5 気仙地方における金鉱床の分布と、八鉢鉱山・玉山金山の地質鉱床

気仙地方ではこれまでに、八鉢鉱山・玉山金山を含む26の金鉱山の存在が確認されている(図3)。

気仙地方一帯に見られる金鉱は、白亜紀末に潜入した花崗閃緑岩から分化した岩脈中に胚胎し、花崗閃緑岩と堆積岩との接触地帯・堆積岩中に多く見出される。

花崗閃緑岩をはじめとする火成岩のなかでも特に結晶の大きいものをペグマタイトと呼び、気仙地方では玉山金山などに分布する。各種の鉱物元素を含有する溶融マグマが地表に上昇する途中、低温・低圧となることで形成されるものであり、その過程において金を含み表出する場合がある。玉山金山一帯は、花崗岩・閃緑岩などから構成されている。中生代前期白亜紀に形成されたと推定されているペグマタイト性石英脈が概ね東西方向に十数条並行に層状分布しており、全山が一大鉱床となっている(註5)。

一方、『住田町史』(註6)によると八鉢鉱山の地質鉱床は古生層の粘板岩および石灰岩から成り、これを貫く花崗岩類により一部変質している部分もあるという。金鉱床は粘板岩および石灰岩中に胚胎した含金石英脈とされている。

6 文献史料からみた気仙産金

気仙地方における金山開発がいつ頃より始まるのか、現在のところ文献史学・考古学のいずれによっても確証を得ることはできない。文献史料からは遅くとも国内で金山開発が隆盛をむかえるとされる戦国期以降には、玉山金山をはじめとする気仙地方の複数の金山の稼働が確かめられるようになる。

現在の陸前高田市気仙町に居を構えた松坂家は、仙台藩の金山下代として近世期を通じ長く気仙郡内の金山の運営に携わり、その記録は「松坂家文書」として残されている(註7)。

それによると、玉山金山は、文禄二年(1593)に豊臣政権の管理下に置かれ、その際に現地管理者に抜擢されたのが気仙郡金山下代松坂家の祖である徳右衛門であったとされる(註8)。

文禄四年(1595)には伊達政宗が領内の諸金山に関する権限を豊臣政権より委譲されたとあり(註9)、その後幕藩体制の確立とともに、仙台藩の主導による金山開発と、本判と呼ばれる採掘免許の発行と引き換えに所定の量の金を納めさせる、郡内住民を対象とした

制度の整備が進められ、気仙郡内における金の採掘が促されていくことになる。

慶長三年(1598)の記録によると、陸奥国伊達政宗領より豊臣政権に対して献上された金の量は、佐渡金山を抱える上杉景勝に次いで全国でも二番目に高く、7,000両を数えている(註10)。南部利直の400両余と比べてもその差は歴然としており、詳細な産地こそ明示されていないものの、気仙郡の諸金山もその豊富な金の産出を支えたものと思われる。

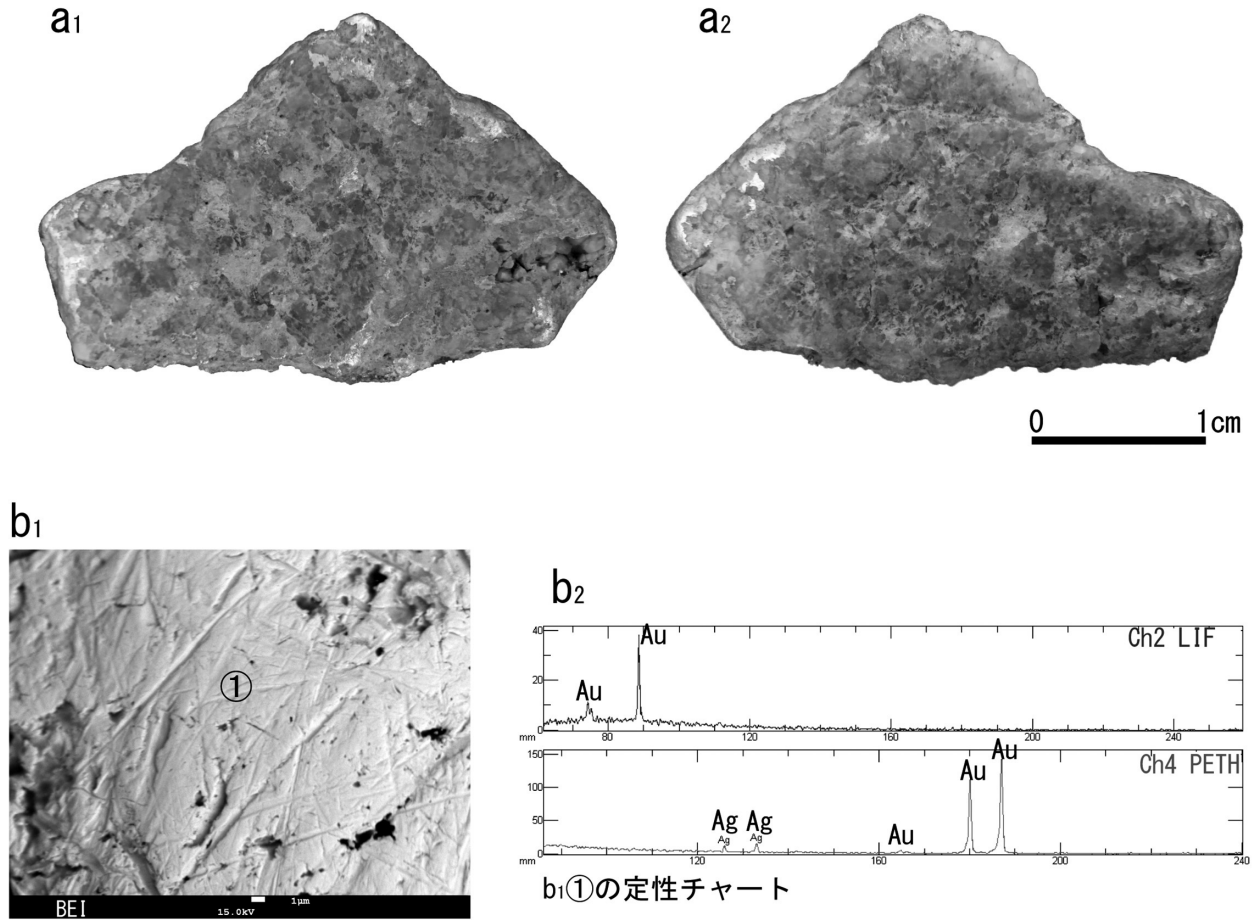
以上に概観した、「松坂家文書」よりうかがえる16世紀末の気仙郡における金山の変遷と、早くも延宝年中(1673-81)には玉山金山からの産金が枯渇傾向にあったという記述(註11)を合わせれば、気仙地方においても16世紀後半までには金山開発が相当度進んでいた蓋然性は高いと思われる。

玉山金山をはじめとする陸前高田市内の金山では、複数の坑道や露天掘りの跡と思われる遺構の存在が指摘されていた。近世においては坑道等を掘り進める中で採集した鉱石を砕き、さらに石臼で搗り潰し、それに水を加えることで、金と金以外の物質の比重の差を利用して金を抽出する方法が主体であったと考えられている(註12)。河川で砂金を採集する場合も、やはり砂金と川砂の比重差を利用する揺り板と呼ばれる道具が用いられてきた。

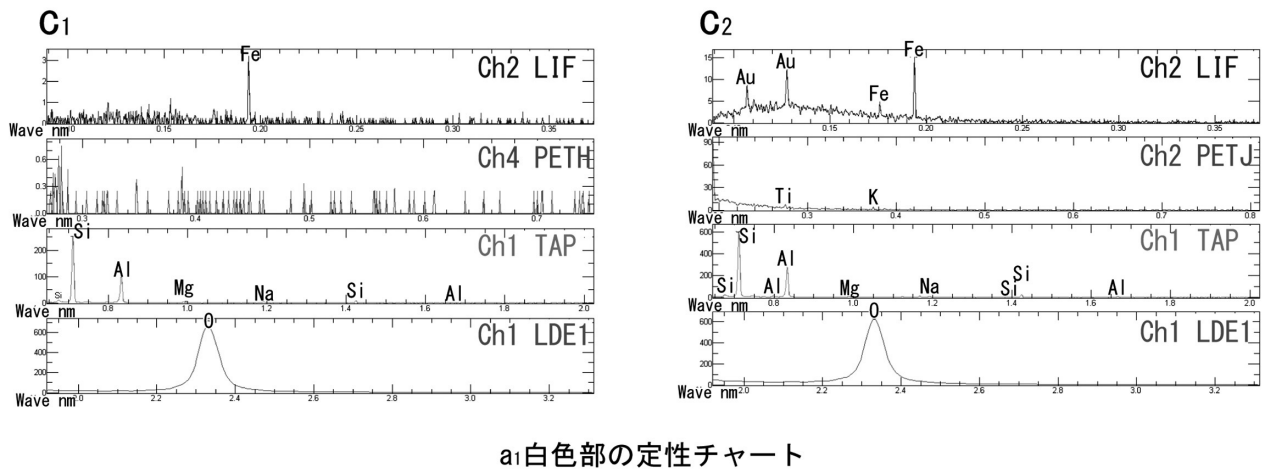
明応九年(1500)頃の成立とされる『七十一番職人歌合』に登場する「金堀」も、現在揺り板やカッチャと呼ばれている金の採集・採掘用具を伴って描かれている。気仙地方においてこのような道具を用いた人為的金採集がいつ頃より開始されたのか、現段階では不明というほかない。しかしながら『源平盛衰記』には、平重盛が中国に自らの菩提を建てるための費用として送った1,300両の金について、その出所が気仙郡であることが明記されている。この記述がどの程度史実を反映しているかについては別途吟味が必要であろうが、少なくとも同書が成立した中世において、気仙郡が著名な産金地帯の一つとして認知されていたことがここから窺い知れよう。

7 奥州藤原氏と気仙産金

気仙地方の複数の金山では、その創業主体を奥州藤原氏に求める伝承を有している(註13)。奥州藤原氏は金色堂に象徴されるように、自らの支配権力を黄金で彩るとともに、自らが管掌する陸奥国内で産出する金



金色を呈する部分のEPMA反射電子組成像



a1白色部の定性チャート

図4 岩手県平泉町柳之御所遺跡出土金鉱石のEPMA分析結果

を、政治・経済の両面で最大限に活用したことは、既に諸先学が指摘するところである^(註14)。一例を挙げれば、「永万文書」^(註15)において、陸奥国内大高山社(柴田郡)・荊田峯社(荊田郡)より神祇官へ献上する年貢について、「大夫伯殿御時」より藤原清衡が金納するようになったという記述が見られる。「大夫伯殿」と目される左京権大夫兼神祇伯康資王は寛治四年(1090)に死去していることから、11世紀末には既に、藤原清衡が一定量の金を入手し、彼の手を経て奥州産金が京都へ流入していたと考えられる。^(註16)

気仙郡が当時の主要産金地であったとすれば、11世紀から12世紀にかけての陸奥国、ひいては列島内においても、その地政学的重要性は言を俟たない。しかし現段階においてその実否を裏付ける文献・遺物いづれにも欠くことは前述のとおりである。

奥州藤原氏による産金の実態を解明するうえでの重要な資料として、奥州藤原氏の拠点とされる、岩手県平泉町柳之御所遺跡から出土した金鉱石(図4)が挙げられる。

上記資料は平成2年度に行われた柳之御所遺跡第28次発掘調査で、28SE15と称される井戸状遺構上部の人為堆積層より発見された。堆積土および共伴遺物より12世紀代の資料と推定され、2010年に他の柳之御所遺跡出土資料と一括で重要文化財に指定された。発掘当初は「熔解した金付着礫」と認識されていたが、指定の際に「金鉱石」と改められた^(註17)。

肉眼観察の結果、白色を呈する石中に金が混在し、石部の所々には赤色を呈する領域が確認された。重要文化財指定の前に行われていたEPMA分析によると、金部には90%を超える金が含有され、他に数%の銀が含まれていた。白色部はケイ素(Si)と酸素(O)を主成分とする領域、ケイ素、アルミニウム(Al)、鉄(Fe)および酸素を主成分とする領域が確認され、岩石・鉱物学的肉眼観察結果を加味すると、それぞれ石英および長石によって構成されているものと推定された。

多少摩耗しているものの、明瞭な人的加工の痕は見られない。本資料は自然風化したままの状態で見られた可能性が高く、本資料が生成された場所では、ある程度まとまった量の金が存在したものと推定される。河川において採集されたとしても、資料形状からは鉱脈の近傍で発見された可能性が高い。

さらに金と銀を主成分とする当該資料の組成は、住

田町八鉢鉱山採集金鉱石および陸前高田市玉山金山採集砂金の分析によって確認された、気仙地方産金のそれと矛盾しない。

以上より、直ちに当該資料を気仙地方産の金鉱石と断ずることはできないが、これまでに行った検討の結果を総合すると、12世紀を中心に平泉に集積されたとされる大量の金の一角を、気仙産金が担っていた可能性は否定できないものと考えられる。この度大津波により被災した住田町八鉢鉱山採集金鉱石もまたそのような気仙地方の産金史に連なるものであり、同地域において産出される金の特徴を知り得る、学術的にも貴重な資料といえる。

8 まとめ

これまで、東北地方太平洋沖地震に起因する大津波で被災した陸前高田市立博物館所蔵気仙産金関係資料の安定化処理と、失われた資料情報を復元する作業を通して得られた知見をもとに、救出した資料の学術的意義を再検討してきた。その結果は以下のとおりである。

- ① 救出された住田町八鉢鉱山採集金鉱石は長石、石英、および方解石に金鉱石が混在し、金部は90%以上の金と、10%未満の銀から構成されるものであることが分かった。この結果はこれまで明らかにされている八鉢鉱山の地質鉱床と整合する。
- ② 旧気仙郡域を構成する現在の岩手県陸前高田市・大船渡市・住田町には、26の金鉱山の存在が確認されており、玉山金山については、20世紀後半まで大規模な調査および採掘の手が加えられていた。
- ③ 文献史料によれば、16世紀末までには気仙郡内において確実に金山開発が進められていた。
- ④ 気仙郡内の金山開発の開始時期については不明であるが、『源平盛衰記』の記述によれば、中世において気仙郡は著名な金産地の一つとして認知されていたことが分かる。
- ⑤ 重要文化財指定以前に行われた岩手県平泉町柳之御所遺跡出土金鉱石のEPMA分析結果によると、金部は90%以上の金と数%の銀からなり、白色部は主としてケイ素・アルミニウム・ナトリウム・カリウムおよび酸素から構成される。岩

石・鉱物学的観察結果を加味すると、白色部は石英および長石を主体としている可能性が高く、その採集地域として、気仙郡を有力な候補地の一つに想定できる。

12世紀における気仙産金の実相については、なお検討を要するものの、⑤に示した想定が事実であった場合、気仙産金は平泉を介して、列島内はもとより東アジアにおける政治・経済的動向に少なからぬ影響を与えた可能性がある^(註18)。

住田町八鉢鉱山にて採集された金鉱石および玉山金山周辺で採集された砂金は、その検討を進めるうえで手がかりとなる資料である。東北地方太平洋沖地震およびその後発生した大津波によって被災し、現在安定化処理および抜本修復が進められている文化財のなかには、原本が流失した「松坂家文書」の複写や、奥州藤原氏の影響下で金山開発に携わった堀子たちの信仰を集めたと伝承される岩手県住田町光勝寺の仏像など、気仙産金と密接に関わるものが多数含まれている。

幸いにして救出された、掛け替えのない文化財の学術情報の再生を通して、未だ不明な点が多い気仙産金の実態の解明に引き続き取り組んでいきたい。

謝辞

本稿の執筆に当たり、岩手大学教育学部土谷信高教授には、本文中で言及している資料の岩石・鉱物学的肉眼観察および金鉱床の成因についてご指導いただいた。また竹駒牧野採草地農業協同組合および日本金山株式会社には玉山金山跡周辺における調査の実施について便宜をはかっていただいた。記して御礼申し上げます。

註

- 1 陸前高田市が国内でも著名な産金地の一つとされていることから、同市立博物館は2000年に県外の古銭収集家より甲州金・蛭藻金とされる資料の寄贈を受けており、幸い両資料についても同金庫内から救出された。これらも学術的に重要な資料であるが、本稿は気仙産金に焦点を当てたものであるため、その詳細については稿を改めて述べる。
- 2 東北歴史博物館『特別展 仙台藩の金と鉄』(2003年) p.8に当該資料が記載されている。
- 3 壺の沢川中流域にある砂防ダムの上流や支流で梶がけ

により砂金を採集した。採集位置は壺の沢川の下流で1地点(地点A)、上流で2地点(地点B~C)、氷上山から流れる壺の沢川支流で1地点(地点D)、玉山金山の南側に位置する木町沢で3地点(地点E~G)および木町沢のさらに南側に位置する壺の沢川の支流沢で1地点(地点H)の計7か所である。このうち地点Dでは砂金は採集できなかった。

砂礫ごとパンニング皿に入れ、大きめの礫は手で取り出し、残った細礫や砂をパンニングした。砂金はD地点を除き、地点B・C・E・Fでは肉眼で確認し、地点G・Hでは双眼実体顕微鏡で確認した。その他の鉱物は、双眼実体顕微鏡で観察した結果、磁鉄鉱、チタン鉄鉱、石英、長石、輝石、角閃石、緑簾石、燐灰石、雲母、ザクロ石、ジルコンなどが確認された。地点B・E・Hの3地点ともに鉄鉱物が最も多く含まれ、地点Hでは角閃石も多数みられた。地点Bでは円磨した塊状の石英や角閃石片も少量含まれる。このほかに3地点ともに板状や球状の鉄滓を含み、特に地点Eで多く確認された。

- 4 これまでに乙部川(盛岡市)と金流川(一関市)で採集した砂金(写真6)はいずれも平板であり、周縁部は丸みを帯びていて、金色の輝きは斑である。一方、玉山金山周辺で採集した砂金は角張っているものが多く、表面の金色の輝きは均一かつ鮮やかで、給源地がごく近い場所にあると推測される。サイズは、乙部川では最大約5mm、金流川では最大で1~2mmであるのに対し、玉山金山の砂金はいずれも1mm以下と小さい。
- 5 『陸前高田市史 第十巻産業編(下)』(陸前高田市史編集委員会、2000年) pp.4-9

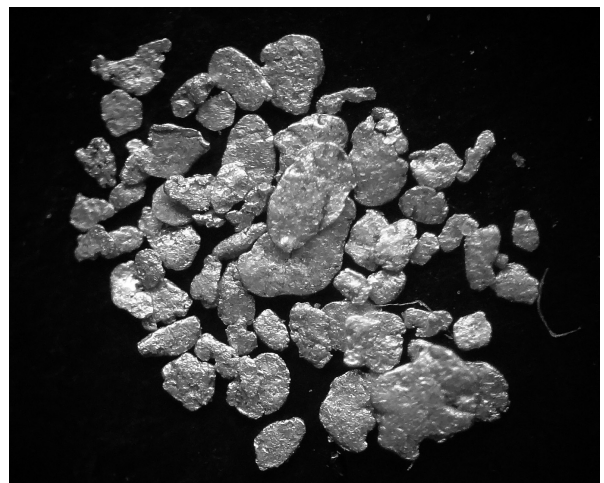


写真6 金流川採集砂金(40倍)

- 6 以下の八鉢鉱山の地質鉱床に関する記述は『住田町史』（住田町史編集委員会、2001年）pp.819-822による。
- 7 当該資料を所蔵していた松坂家は東日本大震災において完全に流失したが、同様に大津波で被災した陸前高田市立図書館から当該資料の複写の一部が救出され、当館において安定化処理が施されている。
- 8 前掲註5書 p.38。
- 9 前掲註5書 p.58。
- 10 森嘉兵衛「陸奥産金の沿革」、『森嘉兵衛著作集第一巻』（法政大学出版会、1987年、初出1936年）p.460。
- 11 前掲註5書 p.135。
- 12 前掲註5書 pp.116-126。
- 13 前掲註5書によれば、玉山金山に加え、雪沢金山、太子金山、および重倉金山について奥州藤原氏との関連が伝承されている（pp.133-148）。さらに前掲註6書によれば、八鉢鉱山をはじめ、住田町内の火ノ土鉱山および清水沢金山にも同様の伝承が残されている（pp.819-825）。
- 14 とりわけ保立道久『黄金国家』（青木書店、2004年）が指摘する黄金を纏った平安時代の王権のあり方は、やはり黄金で彩られた奥州藤原氏の支配権力をいかに捉えるかについて検討するうえでも示唆に富んでいる。
- 15 『平安遺文 古文書編七巻』三三五八号、p.2652
- 16 本堂寿一「奥州藤原文化の基層」、『北上市立博物館研究報告10』（1995年）。なお藤原清衡による貢金の開始時期は明確ではないが、寛治五年（1091）には関白藤原師実への貢馬が記録されていること（『後二条師通記』同年十一月十五日条）と合わせると、寛治元年（1087）に後三年合戦が終結して以降、寛治年間には奥州藤原氏による京都への貢金・貢馬が開始されていたものと考えられる。
- 17 柳之御所遺跡出土金鉱石の発掘調査結果については『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集 柳之御所跡』《分冊1 本文・図版》（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、1995年）pp.201-207より引用。
- 18 院政期における奥州産金の政治・経済的位置については、五味文彦「日宋貿易の社会構造」、『国史学論集』（今井林太郎先生喜寿記念論文集刊行会、1988年）に詳しい。

要 旨

住田町八鉢鉱山にて採集された金鉱石の安定化処理を行い、その組成を解析した結果、主として石英、方解石、および長石と推定される鉱物からなる石部に金鉱石が混在した資料であることが分かった。金鉱石はその大半が金から成る純度の高い鉱石である。この結果は同鉱山の地質鉱床の成因と整合する。さらに気仙地方の河川から採集される砂金は、金を主成分とし少量の銀を含む組成であることがこれまでの調査で確認されている。これらの結果は気仙地方から良質な金鉱石が採集可能であったことを示している。文献史料上からは、中世以降同地方が産金地として認識されていたことが確認されており、奥州藤原氏も気仙産金に関与したと伝承される。柳之御所遺跡出土金鉱石の組成は、今回の調査結果および先行研究と整合する。住田町八鉢鉱山採集金鉱石をはじめとする気仙地方の産金関係資料は、前近代の国内における金の供給の実態を検討するうえで重要な資料である。

キーワード：気仙産金、玉山金山、八鉢鉱山、金鉱石、奥州藤原氏